研　究　紀　要

第 12 号

1 9 9 5

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

巻頭写真　埼玉県内出土象嵌遺物の研究（瀧瀬・野中）

1．広木大町９号墳出土　鐔

2．広木大町20号墳出土　鐔・鎚

3．広木大町２号墳出土　鐔

4．広木大町５号墳出土　鞘尻

5．永明寺古墳出土　鐔・鏃

目　　次

序

方形周溝墓と溝
—方形周溝墓に伴う溝について—
福田　　聖 …… 1

古墳時代集落祭祀の一考察
平岩　俊哉 …… 17

埼玉県内出土象嵌遺物の研究
—埼玉県の象嵌装太刀—
瀧瀬　芳之・野中　　仁 …… 37

北武蔵の古墳時代馬飼養地域
山川　守男 …… 95

中世地鎮の一様相
—大里郡寄居町末野遺跡例を中心として—
鈴木　孝之 ……113

古墳時代集落祭祀の一考察

平岩　俊哉

要旨　古墳時代の集落祭祀について、集落全体に関わると考えられる例を集め、祭祀のありかたを検討した。いまだ類型を確定するまでには至らないが、祭祀のかたちとして遺物の埋納型、散布（散在）型、集積型、配列型の４つを想定した。そのうち、集積型は、土器の種類では坏や甕が多く、高坏が少ないこと、模造品は臼玉が多いなどの傾向があり、これは、集落の住民が個々に供献した結果と考えた。

また、古墳時代の集落では、集落全体に関わるような祭祀跡が必ずしも存在しないことから、自然災害など通常の住居内の祭祀の対応範囲を超えた際に執り行われるものと考えた。

はじめに

古墳時代の集落祭祀研究は、集落内の各住居跡から出土する石製模造品や土器の分析を通じて進められてきた。近年の資料の増加は著しく、それらは、国立歴史民俗博物館や東日本埋蔵文化財研究会の大部な資料集にまとめられている。（国立歴史民俗博物館1985年、東日本埋蔵文化財研究会1993年）

ところで、個々の住居跡とは別に、集落内の一画に石製模造品や土器が集中して見つかる例が年々増えている。こうした事例は、集落全体に関わる祭祀跡と考えられている。埼玉県では、この種の遺跡の例が比較的早い時期から見つかり注目されている。川越市女堀Ⅱ遺跡、同御伊勢原遺跡、深谷市城北遺跡などがそれで、これらは５世紀から６世紀にかけての集落跡である。

本稿では、これら埼玉県の例を中心に、近県の例も合わせながら、古墳時代中期から後期における集落内祭祀について検討していきたい。

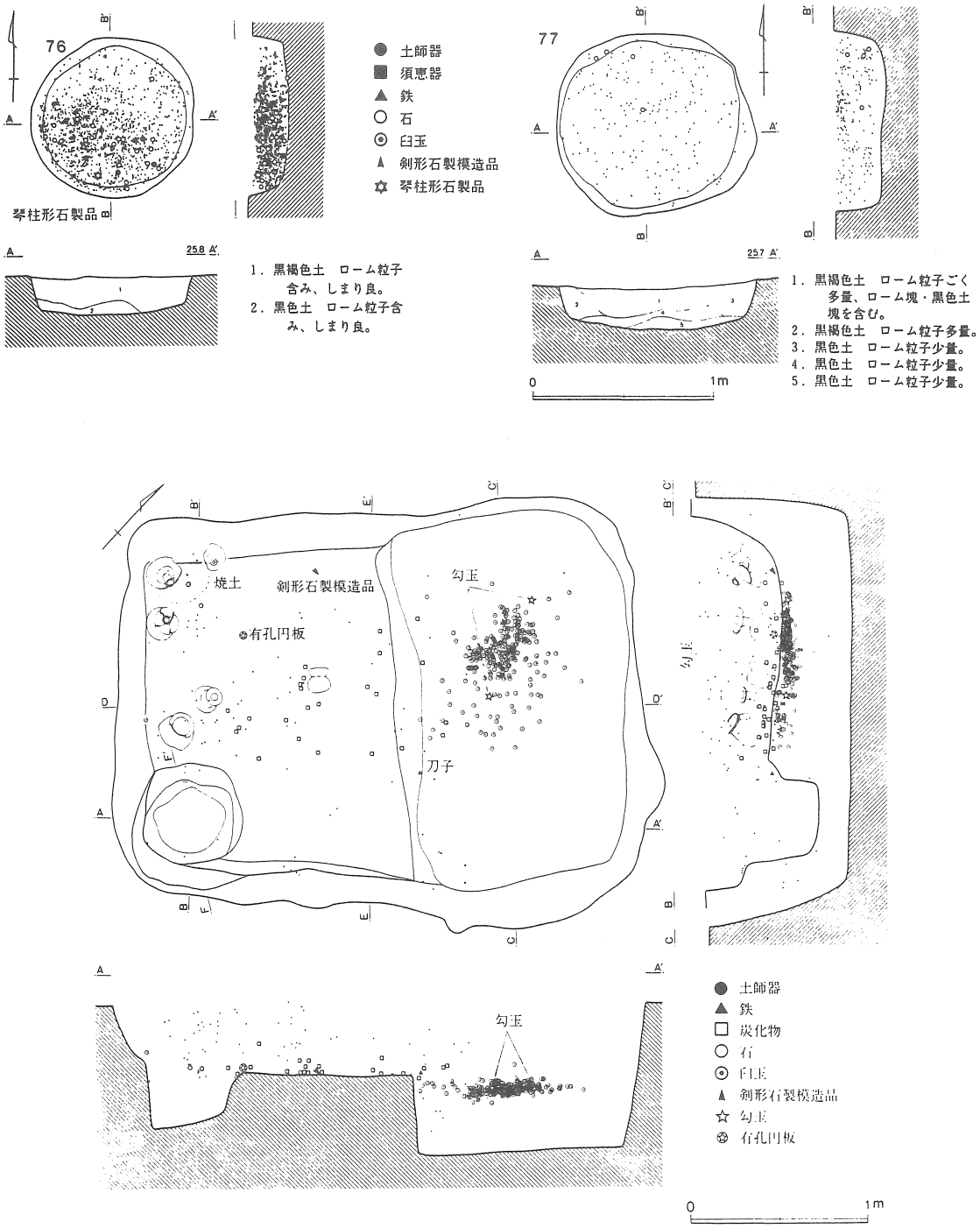
1　集落内祭祀の諸例

(1)　女堀Ⅱ遺跡（埼玉県川越市・立石1987）

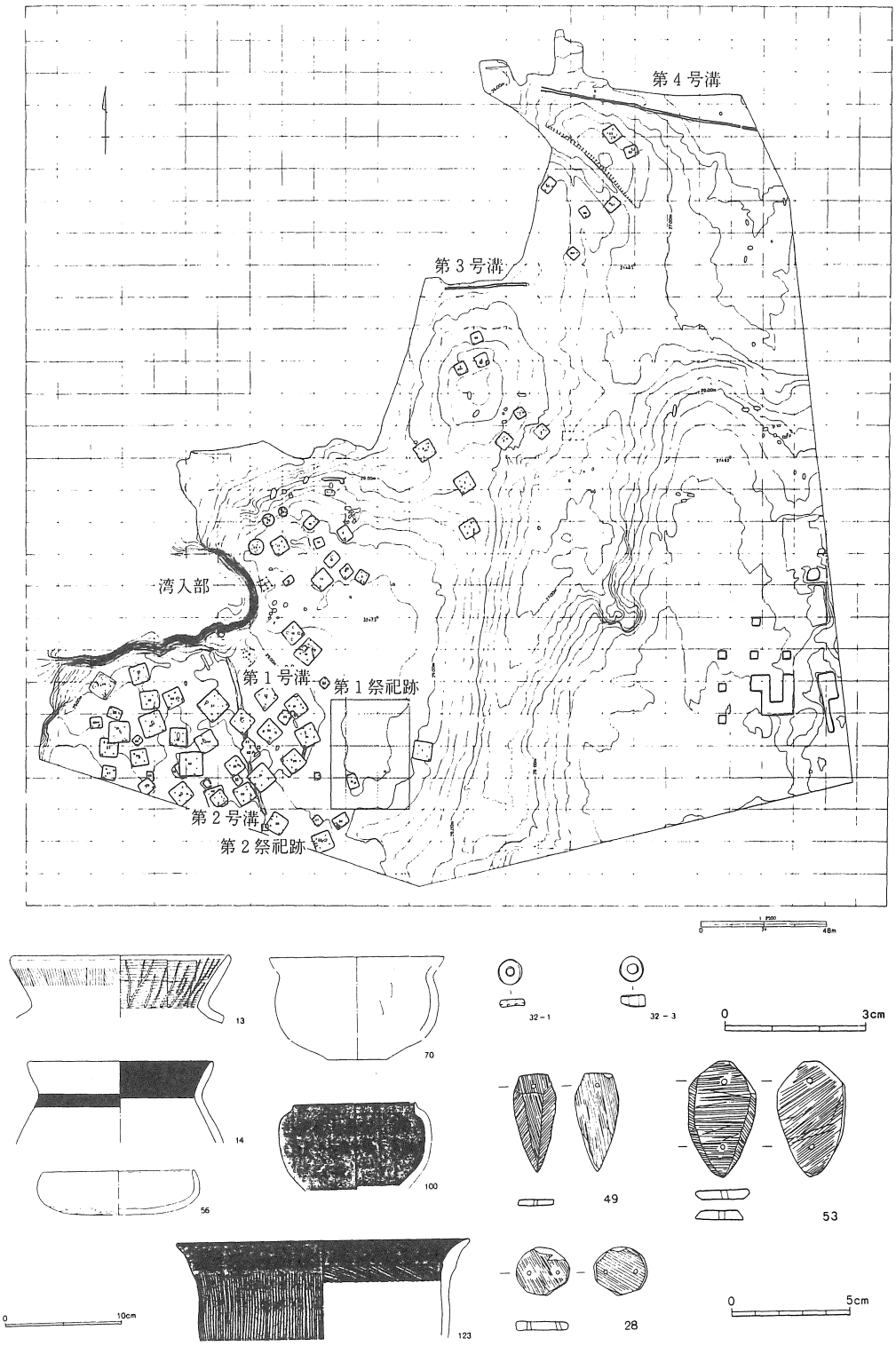
入間川と小畔川に挟まれた標高約28mの台地上に位置する。隣接して御伊勢原遺跡や上組Ⅱ遺跡があり、相互の関連が考えられている。

女堀Ⅱ遺跡では、古墳時代の住居跡が14軒見つかっている。そのうち８軒が和泉期である。そして集落内には、石製模造品や土器を出土した和泉期の土壙が６基あり、報告者はその中の２基を「祭祀関係土壙」とし、４基を「土壙墓」と考えている。（註１）

76号土壙は、大きさ0.92m×0.89m、深さ20cmである。琴柱形石製品１、剣形品２、臼玉８の他に復元不可能な土器片1,130点あまりが出土している。報告書では、石製模造品と壺２、甕２、小型



第１図　女堀Ⅱ遺跡76・77祭祀土壙（上）と135号土壙墓（下）（立石1987年より）



第２図　御伊勢原遺跡全体図と１号祭祀跡出土遺物（立石1989年より）

甕１、高坏５、小型壺３、坩２、甑１の各点が図示されている。

77号土壙は、1.12m×1.01mのほぼ円形で、深さは約30cmである。臼玉４点のほか、復元不可能な土器片196点あまりが出土している。報告書では石製模造品と壺６、甕１、高坏２、小型壺１、坩１の各点が図示されている。

２つの土壙ともに底面から上面にかけて遺物が分布している。さらに報告者は、墓と考えられている91号、92号と呼称される土壙の北側に総計で210点に及ぶ臼玉分布地点があることから、これを祭祀跡ととらえ、祭祀跡での何等かの儀式・使用土器破砕→円形祭祀土壙へ→一部を土壙墓の中へ散布、という流れを想定し、「この祭祀場を葬送儀礼の場と考えたいのである。」と述べている。そして、隣接する御伊勢原遺跡の例と合わせ、「葬」と「祭」が執行の地点を異にしながら、同一の祭具を用いているとして、「葬祭未分化な「神観念の未発達な状態」」と考えている。

(2) 御伊勢原遺跡（埼玉県川越市・立石1989）

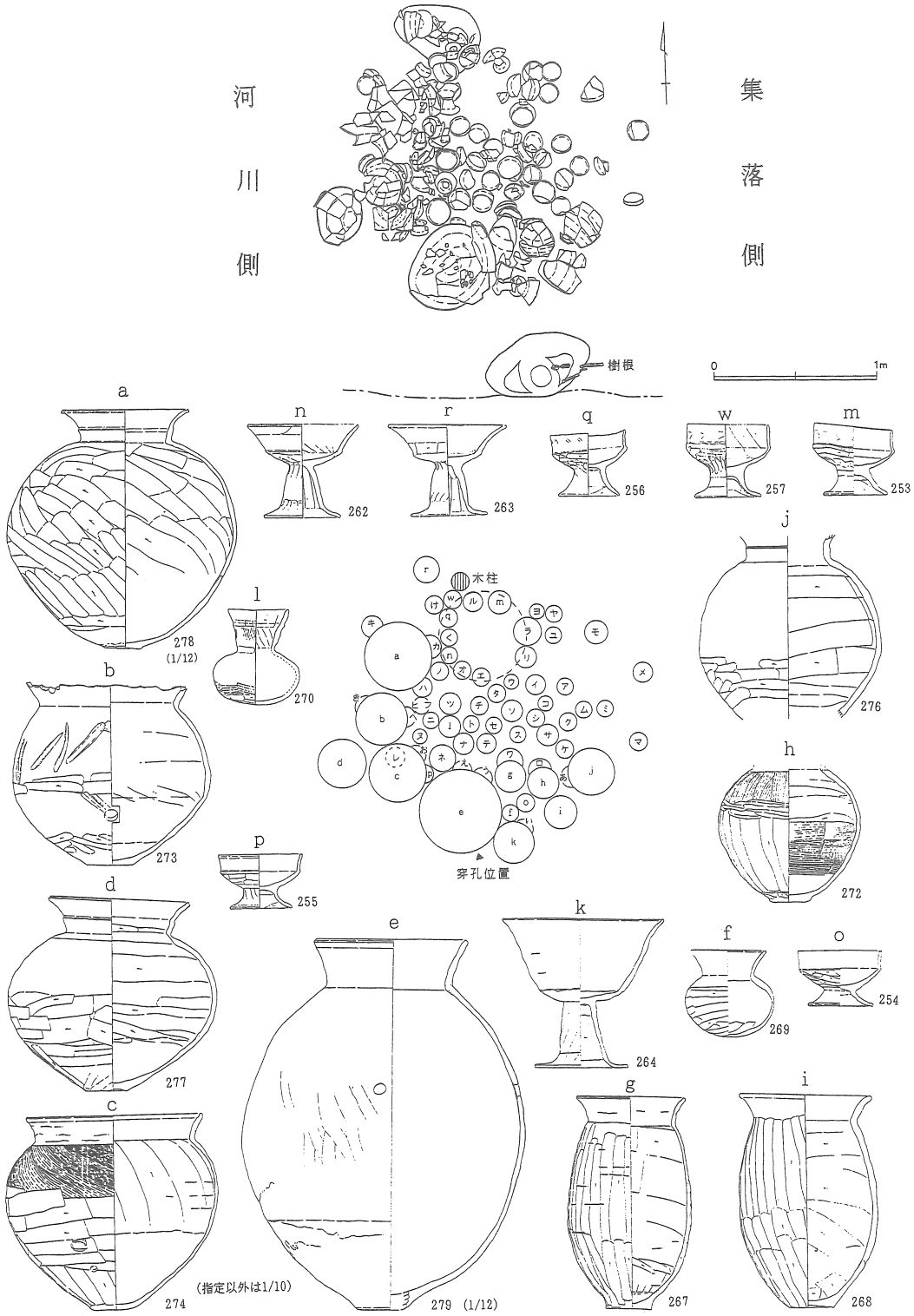
女堀Ⅱ遺跡の南西約350mの所に位置する集落跡である。古墳時代中期（和泉期）の住居跡が68軒のほか２つの祭祀跡が検出されている。１号祭祀跡は、標高29.24mの遺跡中最も高い所に立地する。復元不可能な土器破片数千点とともに、石製模造品の勾玉７、有孔円板41、剣形品65、臼玉1,999点、不明品４点、珪質シルト岩148ｇが見つかった。遺物が地表面に散布していた。焼け土や炭化物の分布もなく、報告者は、祭祀遺構という名称を用いる一方で、「厳密には祭祀に用いた土器と模造品の捨て場に過ぎない」とし、祭祀自体は、別の場所で行われたことを想定している。２号祭祀跡は、１号祭祀跡の西に約30mほどに位置する。２m四方に土器が分布している。１号祭祀跡と違い接合がある程度可能なことから、報告者は「場合によっては、この地点で破砕されたものか、そのまま放置されたものと考え、第１号祭祀跡とは祭祀の種類が異なるものとみなしたい」と述べ、さらに「石製模造品の臼玉の数は、はっきりしないが、剣形石製模造品２点、勾玉（模造品）１点、有孔円板１点と均一に出土していることから、ある種の祭祀に一度に用いられた模造品のセット関係と数を表しているものと考えることもできる。」としている。

報告書では、土器では、甕10、鉢６、高坏25、坩６、小型壺２、坏17、椀29、甑２の各点と石製模造品関係では、臼玉６点、剣形品２点、勾玉１点、有孔円板１点が図示されている。

(3) 城北遺跡（埼玉県深谷市・山川1995ａ・ｂ）

河川の内側に砂層により形成された自然堤防上に位置する。古墳時代後期の住居跡が157軒と祭祀跡５か所のほか、土壙12、溝８、性格不明遺構１、土器集積１が見つかっている。ここでは、集落内にある１号祭祀跡と２号祭祀跡を取り上げることとしたい。

１号祭祀跡は、1.6m×1.8mの範囲に滑石製模造品を伴う土器集積状の遺構である。大型の甕と壺をすえ、その周囲に坏群が積み重ねられている。土器集積周辺の旧地表面では、斑状にＦＡが見られた。土器の集積は、ＦＡ降下前のかなり近い時点での形成されたと考えられている。滑石製模造品は、坏の内外に存在する。坏のあり方には、３種類あることが指摘されている。積み重ねられながら壺に傾倒しているほか、壺・甕の安定確保のためかそれらの底部にあてられたり、壺の胴部に密着を図るように差し込まれるなど興味ぶかい点がある。土器群北縁よりの坏の下面からは、焼骨が出土し猪の可能性が強いという。さらに土器集積北側に接して存在するピットの周辺に剣形品



第３図　城北遺跡１号祭祀跡と土器配置復元図（山川1995年ａより）

や有孔円板が集中することから、ここに木柱状のものを立て、模造品を吊り下げたと推定される。さらに、土器南側には樹痕があるとして、樹木の傍らでの祭祀が想定されている。

出土遺物は、図化された279点のうち坏が237点と圧倒的に多く、その他椀１、短頸壺５、鉢２、高坏19点、甑１、甕３、坩２、壺９である。このうち穿孔された土器が５点あるがこのうちの大型壺は、穿孔方向が集落の方向を向いていることが指摘されている。さらに滑石製模造品は剣形品11、剝片５、有孔円板11、臼玉約630点である。その他ガラス玉が出土した。

２号祭祀跡は、河川跡へ向かう傾斜地に位置する。径１ｍの範囲に甕４点に囲まれるように滑石製品が出土した。旧地表面に放置されたものと推定されている。滑石製品は、刀子形３、斧形１、剝片２がある。

⑷　**中筋遺跡**（群馬県中筋遺跡・大塚他1987、大塚1993、1995）

数次にわたって調査されているが、第２次調査において火山災害によって被災した、５世紀末の集落の様相が明らかとなった。ここでは、２つの祭祀跡が見つかっている。

１号祭祀跡は、東西7.7m×南北4.6mの不正楕円形である。基壇状の高まりが認められ、さらに、中央東寄り2.5m×1.5mの範囲で２～３段の石積みがある。その配石内部に地表面にわずかな窪みを作って土師器の甕が３点１列に据え置かれていた。甕内部まで火山灰が堆積していたので、それらの上を覆うものはなかったとされる。甕の内部や周囲から稲のプラントオパールが多く検出されているという。その周囲に土師器壺、小壺、高坏、甕が置かれている。甕列と北側配石の間には土師器坏が８個体完形で見つかっている。坏や配石内の土から臼玉が、配石南から剣形品が出土している。

また、祭祀跡南側中央、配石の河原石南に接してイノシシの歯付顎骨が見つかったことや基壇西端および北端の焼土の存在から、「生けにえ」祭祀における火の使用が想定されている。河原石はその置き台と考えられている。そのほか祭祀基壇内の広範囲にわたって礫や土器の破砕個所が認められるという。

２号祭祀跡は、東西2.5m×南北1.8mの規模で、礫40数点からなる。中央に唯一の河原石がある他は、亜角礫である。この河原石の前に土師器坏が正位に据え置かれていた。そのやや南に臼玉３点とイノシシの歯が出土したことから、これらは「生けにえ」と河原石の置き台とそれぞれ想定されている。西側周辺には、植物質炭化材が分布していたという。

報告者の大塚昌彦氏は、１号祭祀跡を集落全体の共同祭祀場ととらえ、２号祭祀跡を一世帯単位の祭祀跡と考えている。中筋遺跡では、このほかに「竪穴住居の祭祀」や「畑脇の祭祀」、「樹の祭祀」の存在が指摘されている。

⑸　**黒井峯遺跡**（群馬県子持村・洞口1985、石井他1987、石井・梅沢1994）

吾妻川左岸の丘陵性台地上にあり、標高は約250mをはかる。最大2.5mにも及ぶという榛名山二ツ岳から降下した軽石や火山灰の下から５世紀末～６世紀中頃の古墳時代の集落跡が見つかった。1982年の調査で検出された祭祀遺構は、直径約1.5mほど皿状に掘り窪め、人頭大よりやや小ぶりの河原石を配した中に、土師器坏を中心に、椀、高坏、坩、須恵器坏等の土器が集積されている。報告書では、「本来は、全ての土器が正位置・完形の状態で配置されたものであろう。」とされている。

第４図　中筋遺跡１号祭祀跡（大塚1988年より）

そして出土土器の時間差から長期間、継続した使用が想定されている。

また二次調査では、径約２ｍのドーナツ形の盛土の中から、土師器甕・坏、須恵器坏、臼玉が出土している。これらは、太さ約30cmの木の根元に祭祀終了後の道具類を埋めたものとされている。

⑹　**マミヤク遺跡**（千葉県木更津市・小沢他1989）

東京湾に面した丘陵北向き斜面上に位置する。遺跡の南北全長は350ｍで南側丘頂部標高約65ｍに対して、北側尾根先端部は約40ｍと25ｍの差がある。

集落内に２つの祭祀跡が検出されている。１号祭祀跡は、約３～４ｍ四方の範囲に土器が細かく破砕され散布していた。そして土器群中に石製模造品や鉄製品がちりばめられた状態で出土した。祭祀終了後の破砕行為が想定されている。

石製模造品類は、鏡形１、有孔円板12、扁平勾玉４、剣形品６、臼玉2247、臼玉未成品12、その他未成品２、剝片類９、軽石２の各点がある。

土器では、土師器は坏が図化可能だったものが100点（完形は２点のみ）、甕は40～50点、甕類14点に比べ高坏は数点の破片である。その他瑳１点、手捏９点がある。須恵器は、坏は、接合不可能な破片を含めると40点前後の数が想定され、うち20点（蓋９・身11）が図化されている。その他器台１点、瑳大11点その他雛形鉄製品16点に加え、実用品の鉄鏃10以上、鎌１、鋤先１の各点と管玉が見つかっている。なお１号祭祀跡の中心部北東25ｍのところで長さ9.3cmの子持勾玉が見つかり、相互の関連が想定されている。

２号祭祀跡は、１号祭祀跡のほぼ真西にあり、厚い黒色土の堆積層に約３ｍ四方に土器群が散在する。土器は、土師器が坏17（完形の出土なし）甕類８（全形ほぼ復元３点）、壺類３点、混入品とされる高坏１、須恵器は有蓋高坏のつまみ付き蓋２、坏蓋２、高坏脚部片１、坏破片数点で石製模造品は、扁平勾玉１、有孔円板２、臼玉13点である。そして鉄鏃１点と管状土錘１、不明土製品１、軽石１の各点がある。またこの遺構では、２か所で焼土瘤（局所的な焚火跡と推定）、貝層（ハマグリ、アサリ、シオフキ主体、マガキ、ツメタガイ等巻貝）の堆積があった。

これら祭祀遺構の年代は、伴出した須恵器から、５世紀後半中心とされている。

⑺　**日秀西遺跡**（千葉県我孫子市・上野他1980）

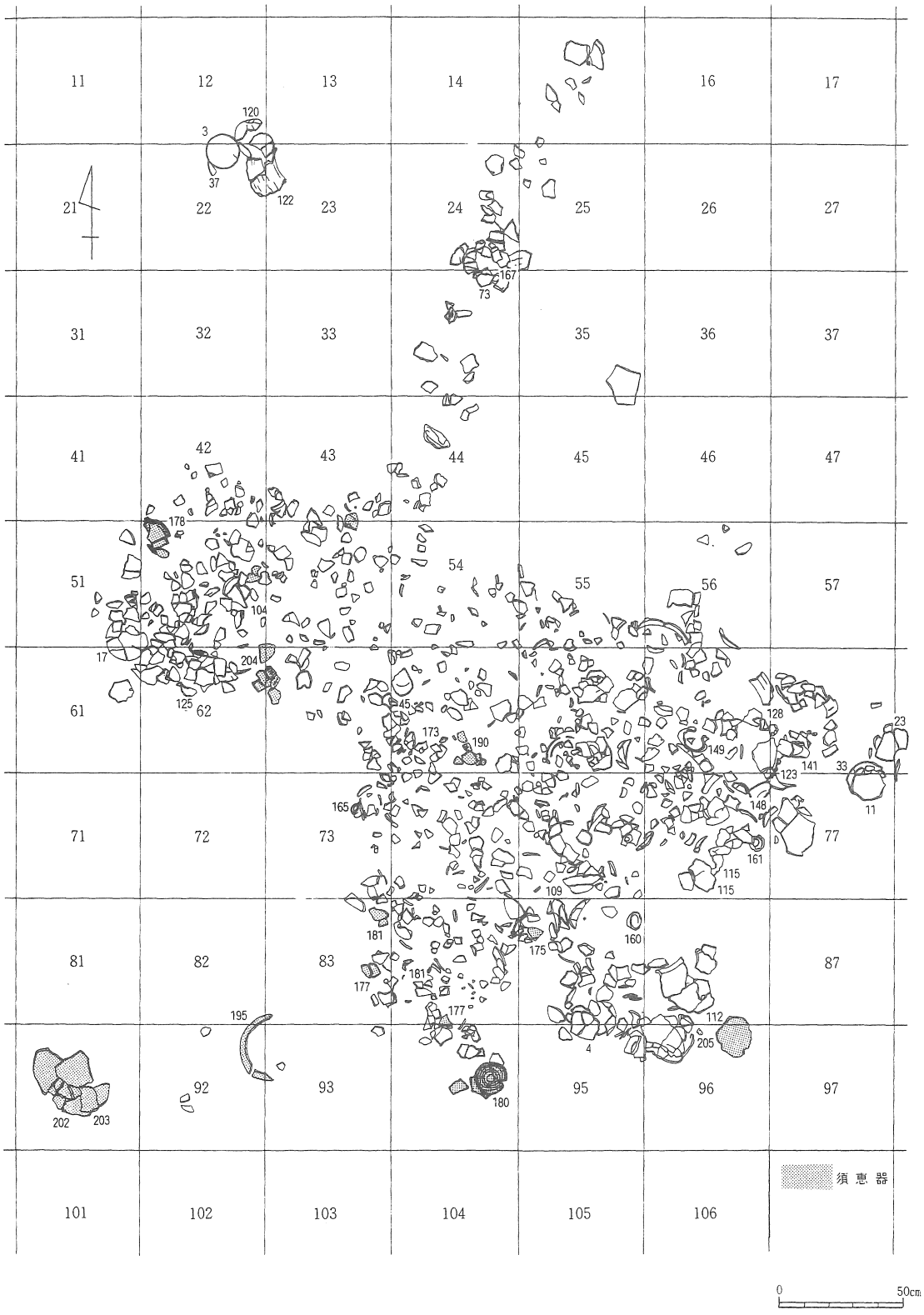
利根川と手賀沼にはさまれた標高約20ｍの台地上に位置する。古墳時代前期と後期の祭祀跡が１か所ずつ見つかっている。

古墳時代前期（五領期）の祭祀跡、266遺構は、遺跡西部傾斜地を上りきった地点に土器を一括として並べたような状況で検出された。すなわち北側傾斜面に器台・高坏を置き、南側平坦面に甕等を並べたというものである。この遺構に近接した２基の竪穴住居跡に炉がないことから、報告者は「日常生活の臭をうかがうことはできない」とし、266遺構との関連を想定している。

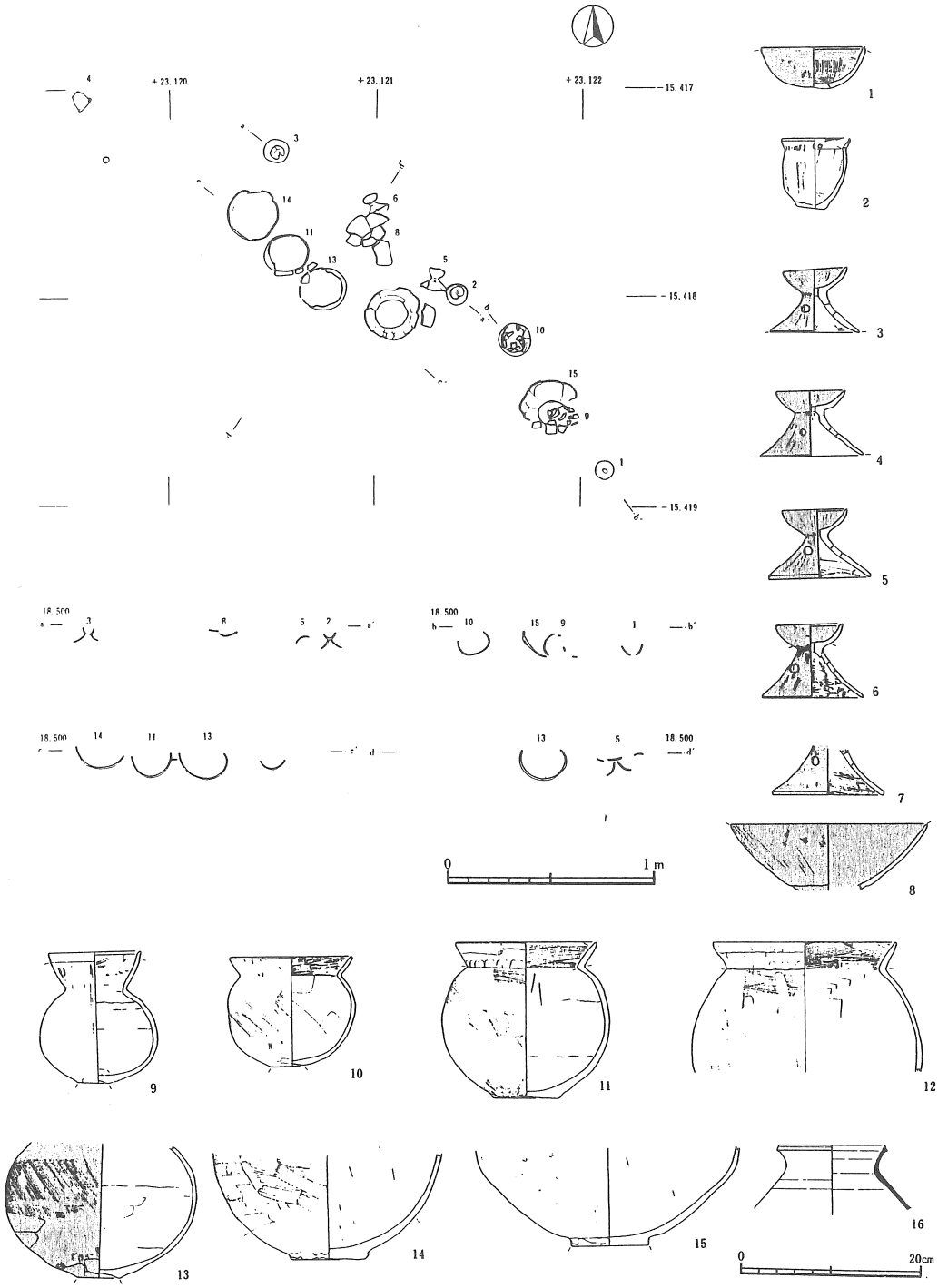
古墳時代後期７世紀の所産とされる271遺構は、小谷にかかる斜面部の黒色土から土器がまとまって出土したものである。鉢形土器が主体で赤彩が多いのが特徴とされる。

⑻　**上灰毛遺跡**（千葉県野田市・飯塚他1991）

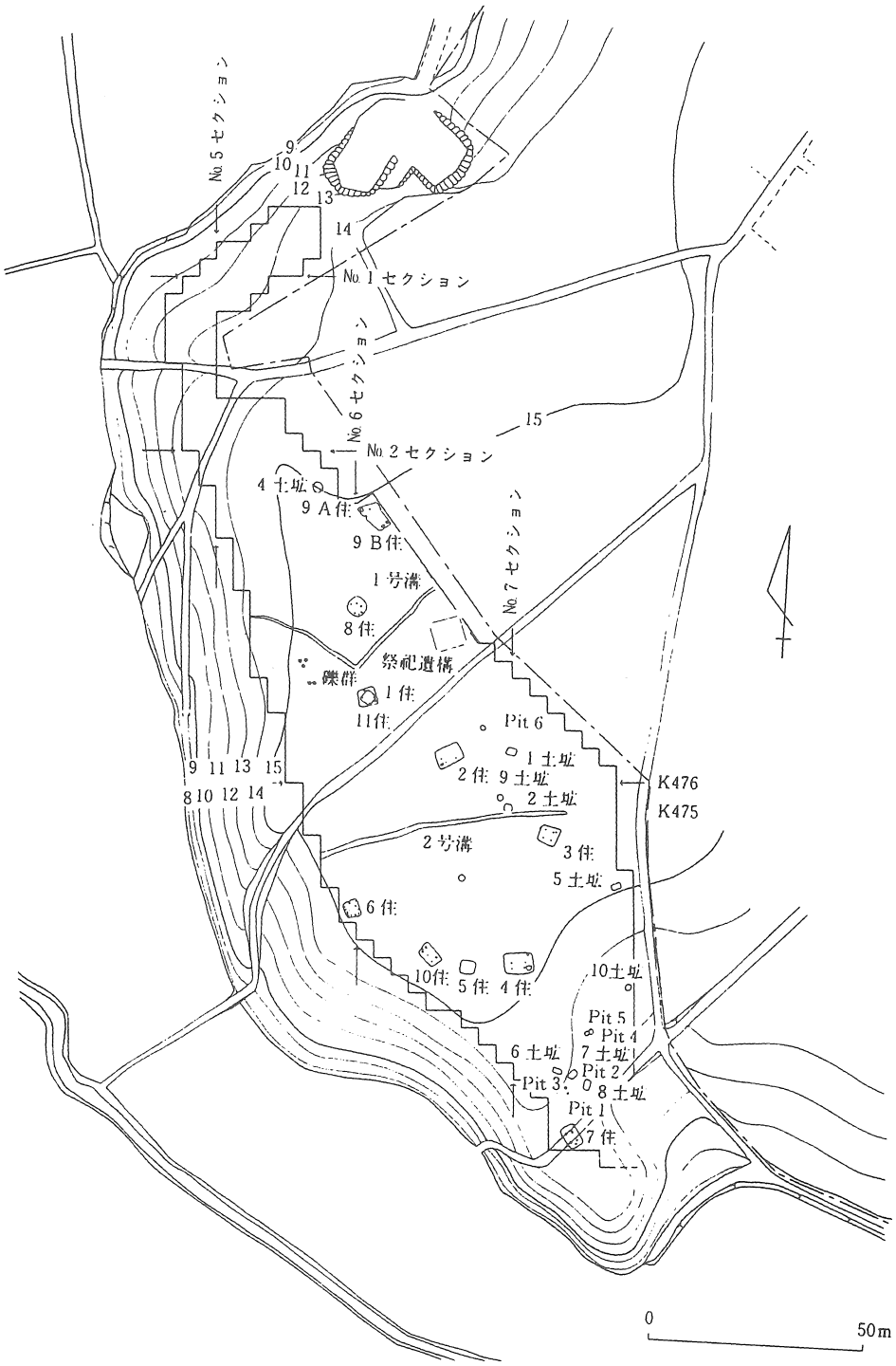
現利根川につながる通称白鷺川の流れる支谷東岸標高約15ｍに立地する。発掘区北東部で祭祀遺構が検出された。約５ｍ四方に多量の土器や石製模造品が出土した。資料整理作業未了であるが土



第５図　マミヤク遺跡１号祭祀跡（小沢他1989年より）



第６図　日秀西遺跡266遺構と出土土器（上野他1980年より）



第７図　上灰毛遺跡全体図（飯塚1991年より）

器は高坏、壺、甕、小型坩、小型壺、石製模造品は管玉３、有孔円板８、勾玉５、剣形品21、臼玉5,741点である。

⑼　正直Ａ遺跡（福島県郡山市・山内他1994）

阿武隈川と谷田川にはさまれた、標高約246～257mの平坦面に位置する。５世紀中頃から６世紀前半にかけての集落跡と祭祀遺構が見つかった。祭祀跡は、３か所ある。

１号祭祀跡は、埋没谷に沿った南斜面下部に位置し、完形の土師器や石製模造品が多量に出土した。もっとも遺物の出土が集中している地点では、「土師器が重なるように出土している。そして、それと同じ範囲で石製模造品やその未成品、石製模造品製作時に剝離されたものと考えられる滑石の剝片が散りばめられたように出土している。」報告されている。

出土遺物は、土師器が坏48、高坏２、甕14(完形少)、坩16、短頸壺１、鉢３、小型甕１、小型広口壺１、「超小型壺１」、石製模造品類は、有孔円板単孔16、双孔74、同未成品３、臼玉122、同未成品１、剣形品38、管状未成品（臼玉原料か）１の各点である。５世紀後半から６世紀初頭の時期とされる。

２号祭祀跡は、調査区外への広がりも想定されているが小規模である。土師器坏６個体分と臼玉３の各点が出土した。時期は、６世紀前半代とされる。

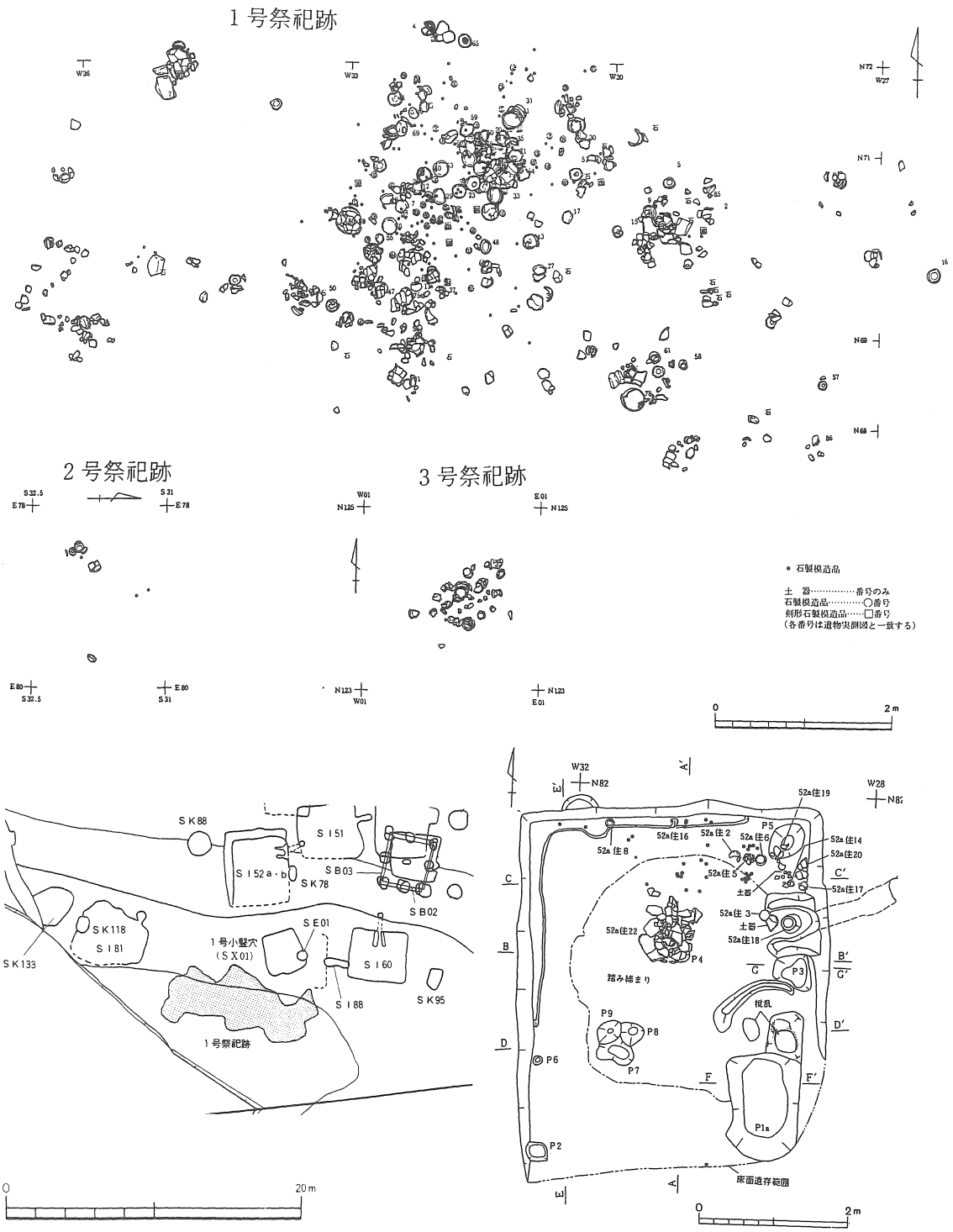
３号祭祀跡は、土師器坏15と有孔円板１、未成品１が見つかっている。５世紀中葉とされる。

なお正直Ａ遺跡の祭祀遺構は、それぞれの隣接遺構との関連が考察され、祭祀の復原が試みられていて、興味ぶかい。例えばＳＩ52ａと呼称される竪穴住居は拡張された住居で石製模造品の未成品や滑石剝片の出土から、石製模造品の製作が考えられている。また床面中央から見つかった遺存高49cm、胴部最大径57.8cmの大型甕の内面の器面剝離が水分の影響と想定され、報告者は、「これは、長期間の液体貯蔵に起因する器壁の剝離と推定される。なお床面中央部での検出状況から、最終的には意図的に割られた印象を与える。」と述べている。またSX01と呼称された竪穴は１辺約２～2.6mの小規模なもので、床面が踏みしめられた跡がないとされ、ピットやカマドもなく、SI52ａと１号祭祀跡に挟まれているという位置関係から、この遺構は、祭祀用具の保管場所とされている。さらに集落内祭祀の実態について、報告者は、大型住居に居住していた首長が執り行い、石製模造品の製作・土師器貯蔵（SX01）→神饌炊飯・神酒醸造（SX01）→儀式→「献供土器、奉奠幣帛の撤下」（１号祭祀跡）という手順を想定している。

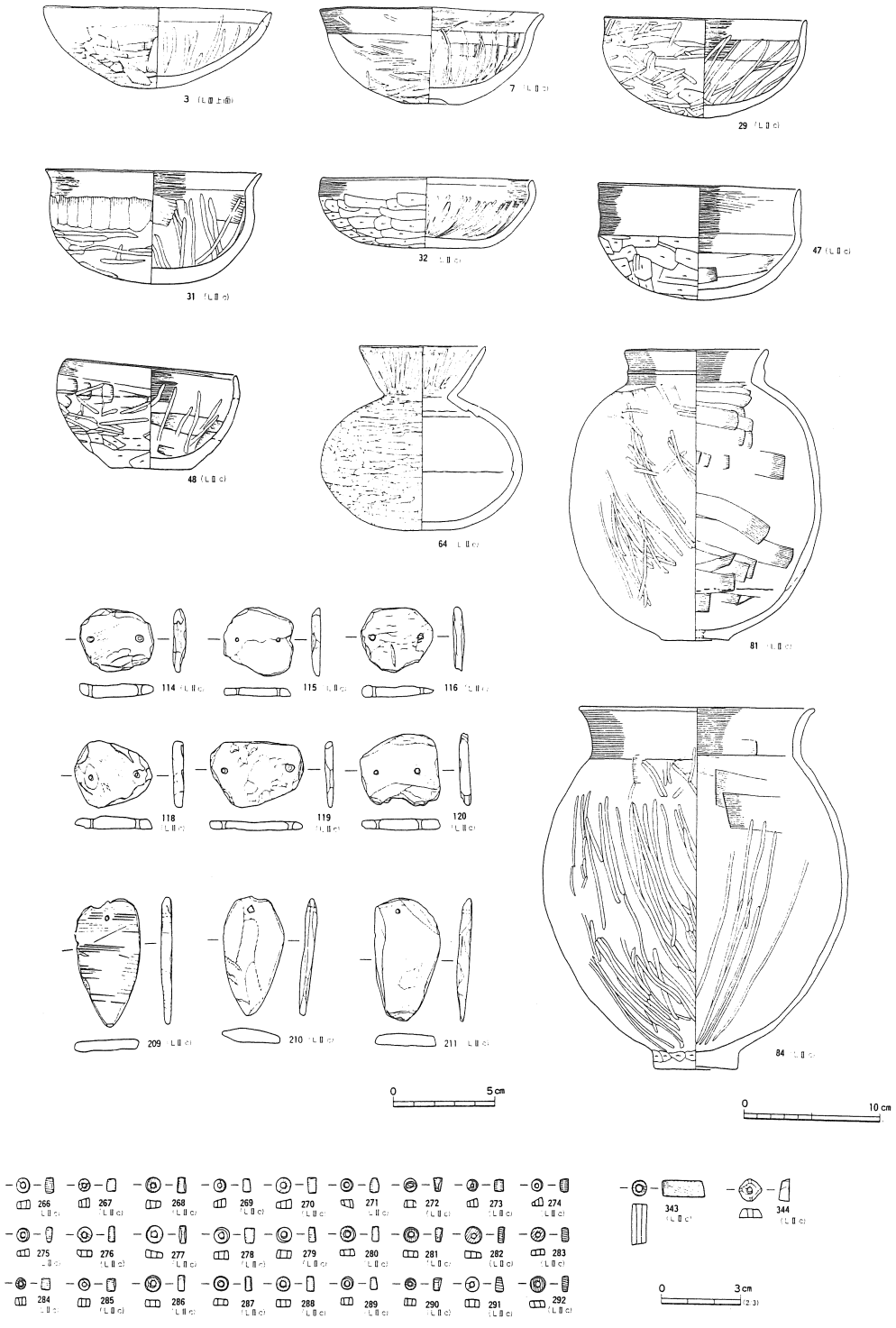
⑽　新田遺跡（宮城県多賀城市・高倉他1991）

多賀城市の西南端、七北田川の東岸微高地上に位置する。遺跡範囲は、東西0.8cm、南北1.6cmに及ぶという。この遺跡の第９次調査で、古墳時代では、中期と後期の竪穴住居跡５軒と祭祀遺構２基、溝１条などが検出された。

祭祀遺構とされるSX1103は、竪穴住居跡の北側平坦面にあり、東西約3.0m、南北約3.5mの範囲である。土師器坏１、高坏８、壺10、甕１の他、周囲から臼玉55、有孔円板23、剣形品23などが見つかっている。５世紀前半の時期とされる。もう一つのSX1102は、SX1103の南側にあり、緩やかに窪むＵ字形の自然地形を利用している。その窪み中央から総点数200点を越える土器が出土し、甕と坏の割合が全体の65％を占めるという。その出土は、「大形の甕、壺を中心に置き、その上に小形



第８図　正直Ａ遺跡祭祀跡（上）・１号祭祀跡周辺とSI52ａ住居跡平面図（山内他1994年一部改変）



第９図　正直Ａ遺跡祭祀跡出土遺物（山内他1994年より）

の壺や甕、鉢、杯を重ねたり、周りに配置している。」と報告されている。甑、手捏土器も見つかっている。さらに臼玉11、琥珀玉１、紡錘車１、砥石１の各点が出土している。こちらは、600年前後の時期が考えられている。なおこの遺跡の２次調査では、二つの土壙(SK172、SK190)からは、「土師器の杯・高杯・器台・甕・壺・坩・甑・ミニチュア土器などがまとまって出土」し、４世紀後葉のものとされている。

2　集落内祭祀のかたち

ここでは、集落内祭祀のありかたについて、先にとりあげた資料をもとに考えることとしたい。なお、例示した資料は、特に東日本では古墳時代の集落内祭祀の代表的な例と思われるが、今後この種の事例が増加することが考えられる。そこで今回は厳密な「類型」を設定するのではなく、祭祀の「かたち」としておおよその傾向を概観し、若干の私見を述べることとしたい。

埼玉県のほか関東近県を中心に、東北地方まで含め、集落内祭祀の例をまとめてみた。もちろんこの種の遺跡の類例は、今後さらに増加することが期待できよう。

ところで埼玉県内においては、集落全体の祭祀に関わるとされる遺構が他にも注意されている。増田逸朗氏は、埼玉県内の祭祀遺跡をまとめる中で集落祭祀の場を集落内、宅内、住居内、カマトに分けている（増田1993)。集落内祭祀の例として円形特殊遺構を検出したミカド遺跡（坂本・鈴木1981）と荒川附遺跡（木戸1992)、柱列群の中に多数の石製模造品を出土した本郷前東遺跡（川口1989)、そして住居跡の存在しない空間に基壇状の高まりが想定され、石製模造品が出土した西富田新田遺跡（菅谷1972）があげられている。また、御伊勢原遺跡２号祭祀跡は、宅内祭祀跡と想定している。円形特殊遺構については、現状ではさらに類例を求めた上で検討すべきと考えている。本郷前東遺跡のような例は、長野県下伊那郡鼎町の天伯Ｂ遺跡（大沢他1975）などに求められるかもしれないが、同様に類例の増加を待ちたいと考える。西富田遺跡例は実際の遺構の状態がはっきりとしないが、中筋遺跡の例もある。しかし現状では、集落内祭祀において普遍的に基壇状の施設があるとは言いきれないだろう。

古墳時代の集落内祭祀について、比較的早い時期に検討を試みたものに、静岡県日詰遺跡を取りあげた鈴木敏弘氏の仕事がある。(鈴木1978年ａ・ｂ）この遺跡については、報告書のほかに、最近では佐藤達雄氏がとりあげている(佐藤1995年)。日詰遺跡では、５世紀から６世紀にかけての祭祀遺構（土器集積）が19か所見つかっている。佐藤氏は、これらを礫群と高坏その他甕、壺、手捏土器の有無、模造品の有無と種類（土製、石製）さらに遺物の出土状況から「散在型」と「集中型」に分類した後、日詰遺跡の祭祀遺構の変遷を軸として、静岡県内の祭祀形態の変遷を述べている。この中では、集落内に特定の場が河原石や土器群により、区画設定された時期を古墳時代祭祀の成立期と位置づけている。この時期は５世紀中葉から後半とされる。ただ19か所の祭祀遺構が、住居群とは別の場所で連綿と続くありさまは、例示した遺跡の集落内祭祀の状況とは異なるものと考える。したがって今回の検討資料の中からは、除外した。(註２)

さて、今回事例として取り上げた遺跡での集落内祭祀遺構は、大別すると、遺物の埋納型（土壙型)、散布（散在）型、集積型、配列型の４つになろう。この点については、先の佐藤氏の分類と共

通するものがある。この中で土壙などに土器等を埋めるやりかたは、古墳時代前期に多く見られるようで、古墳時代の中期から後期には、あまり見られないようである。石野博信氏が提唱したいわゆる「纒向型祭祀」（石野1991）のような状況は、女堀II遺跡の祭祀土壙から想定できない。調査者の考えるように、儀式に使用した土器や石製模造品を入れるという祭祀の過程の一部として考えるか、単なる廃棄を考えるべきであろう。ただ黒井峯遺跡の二次調査で見つかったドーナツ状の盛土に土器や模造品が埋められた例は、別に注意するべきであろう。

次に、御伊勢原遺跡やマミヤク遺跡、上灰毛遺跡に見られるような遺物の散布（散在）が見られる遺構が、問題となってくる。御伊勢原遺跡の報告者は、１号祭祀跡について、集落形成の初期段階から最終まで継続したと考え、全ての器種を含むが傾向として「壺、甕類は少なく、高杯、椀、杯類が多いように感じた。」と述べ、赤彩土器やミニチュア土器、手捏土器の出土量が特に多いということも無いという。そして、１号祭祀跡の性格について、「本来、祭祀跡ではなく、厳密には祭祀に用いた土器と模造品の捨て場に過ぎない」と述べている。これに対し、石野氏は、祭祀用具が一括埋納されていたととらえている。そして、「祭場そのものは明らかではないが、古墳祭祀と同様の滑石製模造品を多量に使用する村落祭祀が行われていたことは確かである。５世紀に普及する多種多量の専用祭具を奉献する祭祀が古墳以外の場で盛んに行われていたことを示す事例である。」と述べている（石野1991）。御伊勢原遺跡の場合は、遺物の出土状況は、散布あるいは堆積が妥当であり、「埋納」とするには、無理があるように思われる。しかし集落の一角に、しかも最高所に遺物の分布が見られることはただ単に廃棄したのではなく、一定の意図をもって行われたと考えるべきである。したがって１号祭祀跡は、破砕した土器や模造品をその場に散布することを目的として形成されたもの、すなわち集落内祭祀の段階の一つでありその意味では「祭場」と考えたい。２号祭祀跡については、土器の接合が可能ということから１号祭祀跡と祭祀の種類が異なる可能性が考えられているが、そうだとすると後述するように、土器集積型の部類に入る可能性もあろう。

マミヤク遺跡の場合も御伊勢原遺跡と基本的には同様であろう。１号祭祀跡の土器の器種構成は土師器では、坏の量が多く甕がそれに次ぐが、高坏が少ないことが指摘されている。須恵器についても坏や甕に比べ、高坏が少ない。こうした点も土器集積型に類似するように思われる。ただ、瑯や鉄製品をはじめとして豊富な出土資料の内容から考えると、一般集落と同列に扱えない面もあろう。２号祭祀跡でも坏、甕の数が多く、高坏が少ない。ただ２か所の焚火跡や貝層の存在が気になるところであるが、これが地域的な特色なのか、遺構の性格にかかわるのかは、今後の課題としたい。

一方土器集積型は、代表的例として城北遺跡をあげることができよう。城北遺跡の調査報告者である山川守男氏は、この種の遺構を土器集積型祭祀跡と呼び、群馬県箕郷町谷ツ遺跡（群馬県立歴史博物館1995）、同町下芝五反田II遺跡（松田1995）や上井出遺跡（清水1992年）を類例としてあげている。先述のように城北遺跡の１号祭祀跡では、土器の配置が復原されている。くり返しになるが、それによると甕や壺をすえて、それらの周囲に坏が重ねられている。滑石製模造品については、北側ピット周辺の剣形品と有孔円板はピットに樹立された木柱や樹枝に吊り下げられ、臼玉は、「小型土器群の集積と並行して坏内に入れられたり、振り撒かれたようである。」とされている。この遺

構の坏に中には、壺や甕の安定を図るように底部にあてられたり、差し込まれているものがあるが、これらは、土器集積をそのままの形で維持するためのものとは、考えられないだろうか。また1号祭祀跡は、6世紀初頭の一時期に形成され、その後そのままにされていた。古墳時代の集落で、集落全体にかかわるとされるような祭祀跡が必ずあるとは言えず、また存在しても一遺跡内での数は多くはない。こうした集落内祭祀は特別なことと言わなければならない。こうしたことから集落全体にかかわると考えられる祭祀の特殊性が予想される。城北遺跡では、榛名山二ツ岳の火山活動との関連が想定されている。(山川1995年b)全ての集落内祭祀にこうした考え方があてはまるかどうかは、今後なお検討しなければならない。しかし自然災害など人々の生活に重大な影響をおよぼす事柄が、通常の住居内祭祀での対応範囲を超えることは、充分に考えられよう。黒井峯遺跡のように継続した使用が考えられる場合は、火山噴火などを含め、自然の驚異に対する恐れが強かったことを意味するのかもしれない。ただ正直A遺跡や新田遺跡の場合の祭祀対象については、さらに検討を要する。

ところで土器集積型の祭祀跡では、土器では甕や坏の占める割合が多く、高坏が少ないことが目立っている。石製模造品では、臼玉が多い。このことについては推測の域を出ないのだが、祭祀執行にあたり、中核をなす甕の周りに積み上げられた坏や臼玉は、数の多さから、集落内の竪穴住居の住民が個別に持ち寄り、供献したと考えたい。すなわち、甕をすえつけるなど祭祀の中枢と考えられる行為（祭場の設定）については別としても集落内の住民全体が主体的に祭祀に参加する形を想定したいのである。出土遺物が住居内で使用されたものと遜色無いのは、こうした事情によるものではないだろうか。そうしたことによって集落内の危機をのりこえようとしたものと考えている。

土器配列型は、集積型の小規模なものを考えられるだろう。古墳時代前期の例だが、千葉県日秀西遺跡の266遺構や、群馬県中筋遺跡の例が該当するであろう。やはり集落内の全員もしくは、世帯単位での祭祀形態（供献）として考えられよう。

さて、これら4つの祭祀のかたちは、互いにどのような関係にあるのだろうか。土器集積型や配列型は、土器類がすえおかれた状態そのままであることがあるから、先述のようにあるいは、祭祀終了後もその場所に「存在」することが大切だったのでなかろうか。祭祀跡を集落内の一角に置き続けることで「信仰」のかたちを残したのかもしれない。その意味では、散布型も同様である。ただし定形化した「施設」を設けるまでには至っていないものである。一方埋納型は、祭祀執行後外からは見えない状態にするのだから、祭祀を執行した土壙はその時点で完結する。他の祭祀と比べると継続性は少なく、一過性のものといえよう。ただ、地点を変えて土壙に祭祀遺物を埋納するという行為が重なれば別である。その意味で、女堀II遺跡の不明の多数の土壙群の時期や性格が問題となってくる。祭祀の手順などについては、先に取りあげた資料の報告者が様々な復原や意味づけを行っているが、その当否については、判断がむずかしい。ただ残っている祭祀遺構の状態を出発点として考えていくことが重要だと考える。そうした作業の積み重ねが4つの祭祀のかたちの相違を解明することになろう。祭祀を執行した後に使用した祭具を処分、集積した場所か、あるいは一連の祭祀行為の痕跡として散布型を考えることもできよう。また、集積型は、祭祀行為の最終的な姿としてとらえることもできよう。

3　集落内祭祀研究の課題

以上限られた資料に基づき、古墳時代の集落内祭祀について概観し、私見を述べてきた。厖大な資料から得られる情報からほんの一部分しかふれることができなかった。今後も資料の収集につとめ、検討を重ねていきたいと考えている。さて古墳時代の集落内祭祀研究について留意しておきたいことがある。それは、石製模造品の保有の問題である。桜井秀雄氏は、この問題について「豪族層から民衆層まであらゆるレベルにまで「石製模造品」という共通な祭祀用具を用いた統一的な祭祀形態が認められるということが理解されるのである。」と述べている（桜井1990）。桜井氏は、さらに別稿で、石製模造品の出土場所について改めて言及し、極めて多岐にわたることから「統一的な祭祀形態」を強調し、その観点から、住居跡から出土した石製模造品の再検討の必要性を述べている。その上で桜井氏は、後神泉氏の論考を高く評価している（桜井1995）。

後神泉氏は、同じ遺跡の中で石製模造品を多く出土するグループとそうでないグループの存在に着目し、石製模造品の供給は、集落間の「譲り渡し」ではなく、在地首長層が祭祀面での支配強化を意図して配布したものであり、集落に対して「限定的かつ選択的」に供給をしていたと考えている。(後神1993)。そうだとすれば、今回取り上げたような集落内祭祀跡との関係が問題となってくる。集落内の祭祀跡は全ての遺跡で発見されるわけでないので、こうした遺構での祭祀執行に同様の論理が存在したかどうか検討しなければならないし、特に土器集積型の坏の多さの原因についても考えなければならない。集落内祭祀について、どの程度支配強化といった側面が追究できるのかが重要な課題といえよう。

おわりに

本稿は、祭祀という復原しにくい内容について、少しでも実態に迫ろうと考えたものである。多くの調査担当者・報告者の努力で世に送りだされた調査成果を曲解しているとすれば、全て筆者の責任であり、至らない点は、今後の課題としたい。執筆にあたっては、山川守男氏や福田聖氏、村田健二の各氏をはじめとして、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の方々には大変お世話になりました。文末ではありますが、衷心より感謝いたします。

本稿は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団平成６年度研究助成の成果である。

註

1　女堀Ⅱ遺跡では、石製模造品や土器が出土した土壙６基の性格を祭祀関係と墓の２通りに分けている。長方形の91号（大きさ3.70m×0.88m、深さ26.0cm）、92号（大きさ2.30m×0.67m、深さ45.0cm）、135号（大きさ2.97m×2.17m）、楕円形の136号（大きさ2.47×1.45m、深さ45.0cm）は、土壙墓であるとしている。その根拠について報告者は、それぞれの土層断面で、棺の痕跡は確認できなかったとしながら「遺物の分布を観ると埋葬のため棺を安置した後、ある程度土を土壙内に入れた段階で、土器の破片や臼玉をばらまくような行為があったことがわかるとともに、棺が腐朽したのち、その上にまかれていた土器片と臼玉が腐朽し空洞化した部分に落ち込んだと解釈できるから」だとしている。

これに対し、坂本和俊氏は、古墳埋葬施設から出土する率の低い剣形品、有孔円板が見られる一方で、木棺の痕跡やガラス玉、刀、鉄鏃等墓に通有のものが無く、古墳に副葬されない層の墓としては少ないとの理由をあげ、「脂肪酸分析などの手続を経ていない以上、直ちにこれを墓と認めるわけには行かない。」と述べている。(坂本和俊「女堀II遺跡」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会1993年)

報告者が墓と考えた上記4土壙は、76号や77号に比べ規模も大きく、出土遺物も豊富である。たとえば135号土壙は二段に掘り込まれテラス状を呈するものである。ここからは、甕や高坏、小型壺や椀などの完形品を含む土器や剣形品、有孔円板や臼玉などの石製模造品や刀子が出土している。遺物の出土状況を見ると、土壙底面よりある程度上がった位置に分布しており、報告者の考えるような、棺安置→土入れ→土器片・石製模造品散布の過程を想定できないとは、言いきれない。したがって現状では、土壙墓とする報告者の考えを尊重したい。ただし坂本氏の言われるように脂肪酸分析等科学分析の実施や、類例の検討により、この種遺構の性格をより詳しく把握できよう。

なお、女堀II遺跡では、時期不明の集積土壙が5基、時期不明土壙が218基あり、報告者は、「ほとんどの土壙から出土遺物がなく性格も不明である。特に5世紀代の集落の一般構成員の墓の存在が気になるところである。」と述べている。この点についても今後の課題として残されている。

2　日詰遺跡の祭祀対象については山の神とする鈴木氏や遺跡南側を流れる青野川の氾濫に関連する川を対象とした祭祀を考える亀井正道氏に対し、佐藤氏は、集落内での祭祀を想定している。私は、本文で述べたように、古墳時代の集落内祭祀の普遍的な形と考えるには、難しいと考えるので、鈴木氏や亀井氏の説に沿って考えていくべきだと思っている。中でも亀井氏の説がより妥当性を持つのではないかと考えている。(亀井正道「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上巻　吉川弘文館　1983年)

引用・参考文献

小沢　洋他　『小浜遺跡群　マミヤク遺跡』君津郡市考古資料刊行会　1989年

飯塚博和　「古代の神まつり―古墳時代中期の野田地方―」『野田市史研究』第2号　野田市　1991年

石井克己・梅沢重昭　『黒井峰遺跡』　読売新聞社　1994年

石井克己他　『子持村史』上巻　子持村　1987年

石野博信　「総論」『古墳時代の研究3　生活と祭祀』雄山閣　1991年

上野純司他　『日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター　1980年

大沢和夫他　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』―下伊那郡鼎町その2―日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1975年

大塚昌彦他　『中筋遺跡　第2次発掘調査概要報告書』渋川市教育委員会　1988年

大塚昌彦　「中筋遺跡」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会　1993年

大塚昌彦　「火山灰で埋まった集落の祭祀（中筋遺跡）」『遺跡報告会　群馬の祭祀遺跡』資料　群馬県立歴史博物館　1995年

『古墳時代の祭祀』第2回東日本埋蔵文化財研究会　1993年

川口　潤　『本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集　1989年

木戸春夫　『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集　1992年

『共同研究古代の祭祀と信仰』国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　1985年

後神　泉　「5～6世紀における集落祭祀の一様相」『古代文化』第45巻8号　1993年

坂本和俊・鈴木徳雄他　『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集　1981年

桜井秀雄　「古墳時代の祭祀をめぐる一考察」『信濃』第42巻第1号　1990年

桜井秀雄　「石製模造品研究の現在」『長野県考古学会誌』76　長野県考古学会　1995年

佐藤達雄　「古墳時代集落における祭祀の変遷―静岡県日詰遺跡中心に―」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集　同刊行会　1994年

清水　豊　「群馬県上井出遺跡出土の祭祀遺物」『群馬県考古学手帳』3　群馬県土器観会　1992年

菅谷浩之　『西富田新田発掘調査概要』本庄市教育委員会　1972年
鈴木敏弘　「集落内祭祀の意義」『神道考古学講座』第３巻　月報　1978年ａ
鈴木敏弘　『南伊豆下賀茂日詰遺跡発掘調査報告』南伊豆町教育委員会　1978年ｂ
高倉敏明　「新田遺跡」『多賀城市史』第４巻　考古資料　多賀城市　1991年
立石盛詞　『女堀Ⅱ・女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集　1987年
立石盛詞　『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調事業団報告書　第79集　1989年
洞口正史　『黒井峯遺跡Ⅰ』子持村教育委員会　1985年
松田　猛　「下芝五反田Ⅱ遺跡」『平成７年度調査遺跡発表会』資料　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995年
増田逸朗　「埼玉県の祭祀遺跡」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会　1993年
山内幹夫他　『母畑地区遺跡発掘調査報告書　正直Ａ遺跡』福島県教育委員会　1994年
山川守男　『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集　1995年ａ
山川守男　「埼玉県城北遺跡の土器集積型祭祀跡―古墳時代後期の集落内祭祀―」『祭祀考古』第４号　祭祀考古学会　1995年ｂ

研究紀要 第12号

1996

平成8年3月25日印刷

平成8年3月31日発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社